



## かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

### 無量寿 (いのち) 大切なものは見えない

新しい年、平成26年がスタートして、早や十二分の一が過ぎ去ろうとしています。皆さまにはどのように過ごされたでしょうか。

喜びや悲しみ、寂しさ空しさもあった1年が終わりまた次の1年へと移っていくお正月は、生かされているいのちを思い、感謝し、新しい希望を共にする節目として祝われ大切に伝承されてきたものだったのではないかと思います。

それぞれのこれからの人生にとって、ただ自分と自分の関わる家族への災いがないことを願い自分以外のところへ行って欲しいとお祓いをしたり、家族の安泰や満願成就を祈願するだけでよいのでしょうか。今集う互いのいのち(生命)を、これからも大切に共有する思いに立ち返ることを、老いや若きの隔てなく共々に思い合う縁にしてこそ、新しい年の始めには相応しい慶事となるのではないのでしょうか。

\* \* \*

仏教では「いのち」ということを寿命と表現することがあります。『広辞苑』の「いのち」にはまず、生命の生きて行く原動力、生命力とあり、二番目に、「寿命」という説明が書かれています。

この寿命という「いのち」の持つ意味は、目に見える生命と、目に見えない生命で成っているという意味で「いのち」の在り方の真理が語られているのです。

見えないいのち「寿」は仏教でいう「無量寿(むりょうじゅ)」のいのちです。

「無量寿」とは、はかりしれないということですが、どのくらいはかりしれないかを仏典には、「ガンジス川の砂の数」に例えていて、数学でいうと10の52乗だそうです。一般に与えられた命の長さを寿命と表現していますが、平均や長さではない、はかりしれない見えない因や縁の「寿」によって支えられ、生かされ、願われているのが「寿命」なのです。

\* \* \*

私たちは身勝手にそれぞれの頭で無責任なことばかり言うものですが、見える命の頭の部分、分別(理性、知性)は、見えない世界を感じることを邪魔し、見えないいのちを認めようとしません。見えるいのちの延長に、自分の老・病・死が迫って来たときの、「生き甲斐がない」「自分はもう役に立たない人間だ」「縁のある人もどんどんいなくなったから私も、」「死んだ方がまし」と言ったりすることに繋がるようです。

もし、そう思ったら一度絶飲絶食してみたらいいと言います。その中で、のどの渇き、空腹感を感じ我慢できなくなって水や食べ物を口にするとしたら、自分の頭は死にたいと思っても、身体はまだ生きることを諦めてはいないと言うことです。しかも、こんな身勝手な考えを当たり前だと思っている人間を、文句も言わず最期の最期まで支え生かしてくれているのが「寿」といういのちの働きそのものなのです。

口では「当たり前だ。当然だ。わかっている。」と常識的に頷いていても、自分と自分に関係する家族や身内には、違う何かをと追いかけて、それが家族を思いやる「善い」ことだと思っていないのでしょうか。

しかし、ほんとうに大切なことは、自分が樹(た)っている場所に気づかされること、すなわち、いのちの在り方にめざめることです。仏教はその道を導く教えなのです。

これは、健康な人も健康でない人も、ガンの末期の人であっても、自分はまだ若い人も同じです。こういう在り方をしているのだという世界にめざめたとき、今、ここに生かされているお互いのいのちはみな平等な朋(友)、いのちの仲間なのだと思える世界がひろがっていくはずで、そのめざめからこぼれる言葉が、「もったいない」「おかげで」、「ありがたい」「すまない」という言葉でしょう。このような感性のなかに見えないいのち(寿)、大切なものが見えてくるのです。

お念仏はその気づき、めざめのみ教えです。そのお念仏の日暮らしを通して、必ず次の世代も感じ取っていつてくれるでしょう。

見たものだけしか感じられない人生は、批判や愚痴ばかりになりがちです。それではあの「お・も・て・な・し」もただ見えたものだけへの善し悪し損得になってしまいます。

新年にあたって、無量寿のおかげの世界を感受できていただろうかと改めて思います。本年も共々にお味わいしてまいりましょう。どうぞお聴聞下さい。

合掌

奏庵法座  
新年初法座

日時  
1月26日(日)  
午前11時より

「真宗宗歌」  
正信偈  
法話  
ご文章拝読  
「恩徳讃」  
～\*～  
おとき

厳しい寒さにも、玄関先の紅梅がいっぱいの花を付け、その香りが上って来る大変さを和らげてくれるようです。

もし当たったらこの参道を楽に上がれるようにしたいと、お参り帰りの二次会「ばば友会」の皆さまが共同で宝くじを買って下さっていると聞き、いつか実現するのを楽しみにするというよりも、そのお気持ちを何よりうれしく思いました。

「聞法は若いうち」という言葉がありますが、自分にとって今日より若い日はありません。遅過ぎたということはないのです。今年も、急がず、無理せず、途中からでも遠慮なく、どうぞ気をつけてお参り下さいますよう、お待ちしております。



## 仏教が生んだ日本語

### 見えないもの・【意地】

「意地」という言葉は、一般に自分の思いを通そうとする心という意味に使われている。「意地を張る」「意地になる」、あるいは「意地悪」など、「強情」と同義で、あまりよくない意味に使われている。

「意地」はもともと仏教用語で、人間の五官による認識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）の次にくる第六意識（心）のことである。それは、あらゆるものを成立させる根源になる大地のようなものであるとされ、人間の心は、ちょうど大地のように、あらゆるものを生み出し、またおさめる無限の可能性も持っている。

しかし、人はどうしても自分中心にものを考えるものである。その心がいわゆる「意地」という感情を生み出し、思うようにならないとき、被害者意識がはたらき、怨みが発生し、そこに紛争が起こっていく。

心は思い通りにならにということは、人間の歴史始まって以来の大きな問題だった。仏教は、まさにこの心の制御の道を教えるものである。

人間の心を分析すると、誰にもある絶えず自己を愛してやまない領域の深層意識から、思い通りにならない心（意地）が生じ、それによってさまざまなトラブルが発生していく。

そのような紛争をももたらす自分の心をコントロールする方法を追求していくのが仏道である。その心を制御するのも、大地のような心にほかならない。

今日、いわゆる意地によってさまざまな紛争が起こっているが、実は意地という言葉そのものの奥に、自らの心の制御という紛争解決の鍵が隠されているのである。

【大谷大学編】

安倍首相の靖国神社参拝は、諸外国から批難され、アメリカは「失望した」と表現したが、このところの国政や沖縄、東京の知事選を何と言ったらいのか、「失望」という言葉が一番的を得ているようだ。■すべからく恥を知らない。日本人のよさはどこにいつてしまったのだろうか。いつも家族に、「バカだねえ～」と嘆かれてばかりいる寅さんでさえ、「恥づかしきことのみ多かりき、愚かしい私をお許し下さい」と年賀状に書いて、すまないと詫びているというのに、自らの愚かさ気づかず、偉そうなしら～とした厚顔を見ると、文化は学歴や職業に関係ないことを今さらながらに痛感する。彼らは自分たちのしてきたこと、やってきたことをいとも簡単に忘れてしまえる人間なのだろうか。■靖国問題は近隣諸国との問題だけではない。日本の中ですら解決されてはいない。その曖昧さは戦後の思想、宗教教育の低さの中で一層酷くなくなってしまっている。その危なさ、あやふやさを戦後生まれの我々ですら知っているのに、安倍首相が少しくらい若いからといって国の長たる者が知らないことは許されない。祖国のために命を捧げた「英霊」をお慰めし敬意を表するのは「善いこと」だという単純さ。票を貰った遺族会への義理立てや個人的な意地くらのことで参拝されては損じた国益の甚大さに見合わない。それ以上に危惧するのは「善いことなのにどこが悪いの？」という若者達を育ててしまっていることだ。このことをお慰めしたとされる戦死者はどう思っておられるだろう。■原発なしで安定した電力供給ができることを願うのは脱原発を叫ぶひとたちだけの専売特許ではないのに、脱原発は「善」だからと、それを題材にして東京都という大舞台でライトを浴びる自分を想像したらすっかりその気になってしまった老殿様だが覇気はなく、その脚本を書く気まぐれ自信家の元総理は困りものだ。■政治問題は単に善か悪かで判断できるほど簡単ではないし、まして美化することは危険だ。国の責任者にはまず事実を事実として認める勇気が求められる。人はみな【語るに値する人生の「重荷」をもつもの】という、いい言葉だ。しがたない庶民の家庭であっても一人の意地や勝手な口マンで傾くのだ。国や行政の責任を担う人には歴史の中の重荷も背負いきる覚悟を見せてほしい。 Norimaru